支援的な関わりと信頼関係の認識

— 犯罪被害者と捜査面接を行った警察官に対する質問紙調査の分析 —

○渡邊和美・横田賀英子・小野修一

(科学警察研究所)

キーワード：犯罪被害者，捜査面接，認識のギャップ

Perception of supportive attitudes and rapport among crime victims and police interviewers

Kazumi WATANABE, Kaeko YOKOTA, and Shuichi ONO

(National Research Institute of Police Science)

Key Words: Crime victims, Investigative interviewing, Perception gap

目 的

犯罪被害者に対する捜査面接においては，被害者の記憶にある情報をできるだけ正確に，多く聴き取る必要がある．そのためには，Fisher and Geiselman(1992)が提唱する認知面接で指摘されるように，被害者とのラポールを形成し，円滑なコミュニケーションを実現することが重要である．我が国では，犯罪被害者支援を推進するため，犯罪被害者に必要な配慮を警察官が行うよう各種施策が行われている．これら犯罪被害者に必要な配慮を行うことは，警察官が被害者との信頼関係を形成するために必要であると考えられるが，この点について実証的に検討した先行研究はなく，実証的な知見を蓄積する必要がある．そこで，本研究では，成人の犯罪被害者及び彼らに対する捜査面接を実施した警察官を対象として，支援的な配慮と信頼関係の認識との関連を明らかにすることを目的とする．

方 法

研究対象 2011年に，成人被害者（殺人未遂，強盗，強姦，暴行，傷害，脅迫，恐喝，強制わいせつ，その他わいせつ，逮捕監禁，略取誘拐，暴力行為等処罰に関する法律違反又はこれらを目的とした住居侵入の被害）に対して面接を行った警察署の刑事課員及び生活安全課員を対象に，質問紙調査を実施した．これと同時にこれら課員により捜査面接を受けた成人被害者のうち，捜査面接後1ヶ月以内に被疑者が検挙され，かつ担当の警察官が本調査に耐えうる精神状態にあると判断した者に本調査を依頼した．調査に同意の得られた者に対して，担当の警察官経由で情報提供書，同意書，無記名式の調査票を配付した．記入した同意書及び調査票は，それぞれ同封の返送用封筒により郵送法で直接回収した．本調査は，科学警察研究所の倫理審査委員会で承認を受けて実施した．

分析対象 回収調査票のうち上記の基準を満たさないものや欠損値の多いものを除き，犯罪被害者とその犯罪被害者に面接を行った警察官のペアを特定できた208票を分析対象とした．

分析方法 支援的な関わりに関する15項目と信頼関係に関する1項目に対する警察官と犯罪被害者の回答との関係については χ^2 検定で検討し，支援的な関わり15項目の合計点（行ったを1，行わなかったを0として算出）と信頼関係に関する問いに対する回答（警察官3段階評価，被害者5段階評価）との関係について，Spearmanの順位相関係数により検討した．

結 果 及 び 考 察

被害者との信頼関係についての警察官の回答は，信頼関係が形成された（48.6%）とわからない・記載なし（51.0%）が同程度で，形成されなかったは0.5%であった．一方，被害者には信頼できたかについて5段階評価を求めたが，「とてもあてはまる」（60.6%）と「まああてはまる」（29.8%）が大半を占め，「どちらともいえない」（7.7%）や「あまりあてはまらない」（1.4%），「まったくあてはまらない」（0.5%）は該当が少なく，警察官と被害者の認識は関連していなかった．支援的な関わり

の合計点と信頼関係との関連をSpearmanの順位相関係数で検

討した結果を表1に示した．被害者が面接を担当した警察官を信頼できるとする評価は，警察官が支援的な関わりをしたとする

	信頼関係の形成に対する認識		被害者の認識
	警察官の認識	被害者の認識	
	n	相関係数	相関係数
支援的な関わり得点			
警察官の認識	208	-0.177 *	0.243 **
被害者の認識	170	0.276 **	0.410 **

注)**は $p<.01$ 、*は $p<.05$ を示す。

の形成との間の相関は低かった．この結果は，警察官と被害者との間には，支援的な関わりと信頼関係の形成に関する認識のギャップがあることを示しており，支援的な関わりや信頼関係について評価する場合には，被害者自身の回答により重点をおく必要性を示唆する．

表2には，支援的な関わり15項目に関する被害者と警察官のそれぞれの認識の関係の結果の一部を示した．1項目は質問文の問題から警察官の認識については欠損値とした．殆どの項目で，面接を担当した警察官の回答に関わらず，被害者は支援的な関わりをその警察官が行ったと報告しており，認識にはギャップが認められた．被害者には複数の警察官が関わるため，配慮や関わりについて被害者にソースモニタリングを求めるのは困難な課題であったと考えられる．また，表2に示される項目のうち，被害者があったと回答した割合の高い項目は，被害者が警察官を信頼できると評価することにつながる重要な項目であるといえよう．さらに，被害者があったと回答したものの警察官が行っていないと回答した項目については，信頼関係の形成のために，警察官がより意識的に実践していくことが必要とされる関わりであるといえよう．

表2 被害者支援的な関わりの有無と被害者の認識

	被害者の認識		あった	
	全体		警察官の認識	
	%	n	行った	行わなかった
自己紹介をした	88.8	182	75.1	13.7
捜査のために，どのような情報が必要となるか，説明した	84.2	171	53.2	31.0
被害者について話すことはあなたにとって大事なことで，と説明した	83.3	165	25.3	58.1
話してくれてありがとう，と感謝の意を伝えた	83.2	168	47.0	36.1
複数の人が同じ事を聞くが，協力してほしいと説明した	82.4	168	38.7	43.6
実況見分を行った場合，その必要性を説明した	81.7	161	49.7	32.0
今後捜査が進んだら，どのようなことが行われるのかを説明した	81.0	166	55.1	25.9
連絡先を伝えた	76.1	153		
思い出したことがあれば，いつでも連絡してくださいと伝えた	71.7	142	41.9	29.8
ケガなどで医療的なケアがすぐに必要か，たずねた	66.7	132	19.7	47.0
具合が悪くなったら，すぐに言ってください，と伝えた	62.0	124	37.5	24.5
再被害にあわないための対策（警戒等）について説明した	55.3	110	29.6	25.6
『被害者の手引き』を手渡した	29.4	60	17.6	11.8
被害者支援団体に関する情報を伝えた	27.1	54	10.1	17.1
話を聞く警察官の性別について希望があるか，たずねた	16.2	33	5.9	10.3

注)***は $p<.001$ 、**は $p<.01$ 、*は $p<.05$ 、+は $p<.10$ を示す。

謝辞：ご協力いただいた犯罪被害者の皆様に深謝いたします。